月4,400円)・1部売り(税込み)朝刊150円 夕刊50円)　京都新聞　2021年(令和3年)10月16日　土曜日　第3種郵便物認可

筋ジス病棟で「虐待」3割超

ナースコール無視 ネット利用制限 入浴の異性介助

全身の筋肉が徐々に動かせなくなる難病、筋ジストロフィー（筋ジス）患者が入院する「筋ジス病棟」の実態調査を、京都市の障害者団体などが初めて実施し、15日に報告書を公表した。病院スタッフから「虐待」を受けたことがあると回答した人は3割超に上り、中でもナースコールを長時間無視されたり、外部とつながるインターネットの利用を制限されたりするなど、患者が抑圧されている現状が浮き彫りになった。当事者らは「閉鎖的な環境や慢性的な人手不足が背景にある」と訴える。（28面に関連記事）

京都の当事者ら調査 18病院58人

筋ジス病棟は全国に26病院あり約2千人が入院している。長期にわたり入院を余儀なくされる人が多く、限られた人間関係などから虐待や人権侵害の温床になっているとの指摘がある。

調査したのは、当事者や障害者支援団体などでつくる「筋ジス病棟の未来を考えるプロジェクト」（事務局・京都市南区）。病棟の実態を把握し、地域生活への移行を後押しするのが狙い。これまでも国による調査はあったが、今回は自らも介助を必要とする当事者が直接聞き取った。

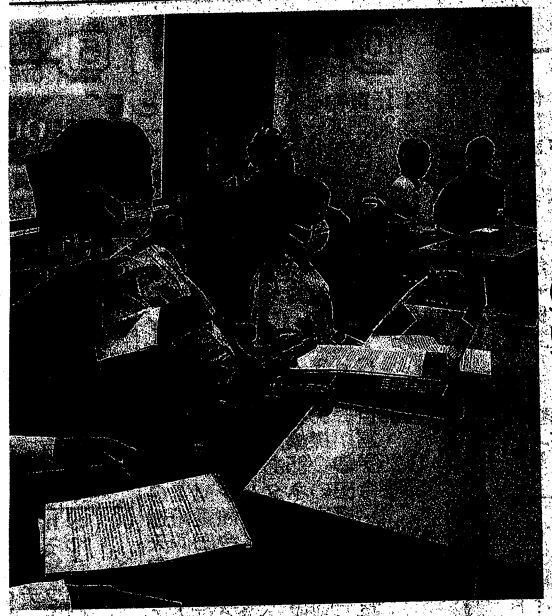
2019年2月～20年9月に入院生活におけるケア状況など約50項目を尋ね、18病院58人（男性48人、女性10人）から回答を得た。その結果、命綱ともいえるナースコールの最長の待ち時間は2時間5人、1時間6人、最も多かったのが30分間9人で、「来なかったことがある」と答えたのは11人だった。過半数が「ナースコールを手の届かないところに置かれたことがある」とした。

人とつながる手段であるネット利用について、必要なサポートを受けられず利用を制限されている人は4割に上った。一方で、女性患者ならではの困難さも判明。特に排せつや入浴などの介助を男性スタッフが担う「異性介助」には「入浴介助に初めて男性がきた時は泣いた」「恥ずかしいなんて、あなたがおかしいと職員に言われた」といった声が寄せられた。こうした性的なケースを含む「虐待」を経験した人は10人中6人だった。

「人手不足のしわ寄せ」

この日、京都市南区の京都テルサで記者会見した脊髄性筋萎縮症の大藪光俊さん（27）＝向日市＝は「当たり前の権利が侵害され、抑圧されている現実が浮かんだ。病院のスタッフを責めるつもりはないが、人手不足などの構造上の問題が患者へのしわ寄せになっている」と指摘した。昨年6月に筋ジス病棟を退院し、北海道で独居生活する吉成亜実さん（28）は「地域の医療態勢が不十分だと退院したくてもできない。開かれた病棟にしなければ」と呼び掛けた。

報告書は厚生労働省などに提出し、改善を求めていくという。（森大樹）



筋ジス病棟での人権抑圧について報告する大藪さん（左から3人目）ら難病患者＝15日午後、京都市南区・京都テルサ　撮影・松村和彦